

訪問看護実習協力に関する在宅療養者と家族の肯定的認識

小笠原映子

Key words : 在宅看護学, 訪問看護実習, 看護教育, 在宅療養者, 肯定的認識

要旨 目的：本研究は、訪問看護実習における療養者・家族が認識する肯定的側面を明らかにし検討することを目的とした。方法：実習協力を行っている療養者と家族を対象にした無記名式の質問票調査。結果：94人中71人から回答が得られた（回収率76%）。75%の対象者は実習協力のやりがいを感じていた。実習協力の理由は在宅看護に携わる人材育成への貢献、実習協力による精神的健康面への受益、訪問看護師からの依頼、実習を受け入れて良かったことは、実習生の対応に対する満足感、実習生の学びに貢献する喜びであった。実習生に学んでほしいことは、療養者・家族の気持ちに配慮したコミュニケーション、個別性の高いケア、介護負担を含む在宅療養の実際、基本的マナーなどであった。考察：療養者と家族側の肯定的認識を高める視点に着目することは重要であり、療養者・家族のQOL向上や円滑な実習運営につながると考える。

I. はじめに

超高齢・多死社会の波を受け、病院完結型医療から地域完結型医療への転換が政策的にも取り組まれている。国は、住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域包括ケアシステムの構築を推進している。地域包括ケアにおいて、看護職は医療機関と地域の橋渡しとしての役割が求められることから、看護基礎教育における在宅看護の学習への期待は高く、特に在宅看護実習の重要性はますます高まっている。

在宅看護実習のうち、学生が訪問看護師に同行して療養者宅を訪問する訪問看護実習は病院実習とは違い、療養者との接触時間は間歇的で短い、訪問看護師や療養者と濃厚な時間を共有できる。また対象者宅への訪問看護を通じて、対象者の生活様式の多様性や対象者の生活に即した看護を理解できるという特徴がある。一方、長期療養生活を送っている療養者・家族は次から次へと新しい実習生を受け入れることが少なくない。

訪問看護実習に関する先行研究の多くは、実習生を対象とした報告¹⁻⁴⁾であり、実習対象者である在宅療養者・家族を対象とした報告は少ない。実習対象者に

着目した研究としては、病院実習において、実習生の積極的姿勢の不足が実習協力に対する否定的認識につながるとの報告があり^{5,6)}、実習生の態度に関する課題が指摘されている。一方、肯定的認識としては、母性看護学実習や小児看護学実習において「実習生の成長への期待」や「実習生の学習のため」など、社会貢献としての認識も報告^{5,7)}されている。在宅看護実習においては、実習に協力したことによる「楽しみや喜び」、「気分転換」等、学生との関わりが刺激になることについての報告はあるが^{8,9)}、他の看護学実習で報告されている人材育成への貢献に関する肯定的認識については明らかとなっていない。本研究では、在宅看護実習協力における療養者・家族の肯定的側面として、実習協力のやりがい、実習生に学んでほしいことなど、看護学生の人材育成への貢献に関する肯定的認識を明らかにし、訪問看護実習のあり方について検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

対象は、在宅看護実習に協力している療養者と家族とする。本研究では、A県内の看護系大学の在宅看護

実習を2カ所以上受け入れている訪問看護ステーションで、便宜的サンプリングにより協力が得られた訪問看護ステーション管理者に訪問看護利用者の中から以下の条件を満たす対象者について選定を依頼した。1) 学生の実習を3か月以上受け入れており、2) 療養者が回答可能、もしくは療養者の回答は難しいが家族主介護者が回答可能であるとした。但し、家族主介護者は、訪問看護実習中に在宅し、実習生の実習状況を知る機会がある者とした。回答は、療養者が可能な場合は療養者に、療養者が不可能な場合は家族介護者に調査の回答を依頼した。

2. データ収集方法

無記名式の質問票調査を実施した。質問票の配布は、訪問看護師が訪問看護サービス提供時に行い、回収は郵送もしくは訪問看護師への手渡し of のいずれかを対象者が選択した。後者を選択した場合は、訪問看護師が対象より手渡された調査票の厳封を確認し、訪問看護ステーション内に設置した回収袋に保管したものを、後日回収した。調査は2012年7月から9月に実施した。

調査項目は、1) 療養者の概要として年齢、疾患、要介護状態区分、会話の状況、生活状況、訪問看護利用期間、訪問看護利用頻度、家族主介護者、調査回答者、2) 実習協力へのやりがい、3) 実習に協力している理由、4) 実習を受け入れて良かったこと、5) 実習生に学んでほしいこととした。1) 2) は選択式とし、その他の項目は具体的事項を記載する欄を設け、自由記載式で回答を求めた。

3. 分析方法

選択式の設問は基本統計にて度数、パーセンテージを算出した。自由記載から得られた質的データは意味を損なわないように一文一義に分割し要約したものをコードとした。コードは類似性に従って整理し、サブカテゴリ、カテゴリに分類した。結果の真実性を確保するために、在宅看護学の専門家にスーパーバイズを受けた。

4. 倫理的配慮

本研究は群馬大学医学部疫学研究に関する倫理審査委員会より承認を得て実施した(承認番号24-24)。質問票の表紙には、研究目的、方法、同意の自由(質問票への回答や提出は自由であること)や公表、研究不参加の場合でも不利益はないこと、質問票の回答・返信をもって調査への参加の同意とみなすことなどにつ

いて記載した。

Ⅲ. 結果

調査の協力を得られた訪問看護ステーションは7カ所であった。選定条件を満たす療養者または家族主介護者94人に調査を依頼し、71人から回答が得られた(回収率75.5%)。

1. 対象者の属性(表1)

療養者の年齢は、70歳以上が全体の64.9%を占めていた。療養者の疾患は、神経難病が最も多く18名、脳血管疾患16名、がん10名であった。療養者の介護度は要介護度5が最も多く25名(35.2%)、要介護度3以上は全体の44名(62.0%)であった。

訪問看護の利用期間は平均4.9年であり、最長は17年であった。訪問看護の利用頻度は、2回/週の利用が22名(31.0%)と最も多く、次いで1回/週が20名(28.2%)であった。家族主介護者は、配偶者が30名(42.2%)と最も多く、子どもが21名(29.6%)であった。調査の回答者は、療養者本人17名(24.0%)、家族主介護者47名(66.2%)であった。

実習に協力することへのやりがいは、無回答が13名であった。回答のあった者のうち、「大変感じる」16名(27.6%)、「まあまあ感じる」27名(46.6%)、「あまり感じない」9名(15.5%)、「全然感じない」4名(6.9%)であった(表2)。やりがいを「全然感じない」と回答した4名(7%)のうち、3名は実習に協力している理由を、実習協力を「頼まれたから」、看護師が「連れてくるから」と回答していた。

実習に協力している理由として得られた自由記載については、40名(56.3%)から記載があり、質的分析の結果、45コードが得られた。以下、サブカテゴリを《》，カテゴリを【】で記す。

実習に協力している理由としては、3つのカテゴリが抽出され、【在宅看護に携わる人材育成への貢献】【実習協力による精神的健康面への受益】【訪問看護師からの依頼】であった(表3)。

【在宅看護に携わる人材育成への貢献】は、「経験を通して実社会に出てからの学習に役立てて欲しい」という《実習生の学習のため》、「病院の医師や看護師にもっと在宅医療を理解してもらいたいの、学生が実習をすれば、看護師になった時に、少しでも理解してもらえと思うから」という《在宅療養者の生活を理解してほしいため》、「お役に立てればと思います」という《社会貢献》で構成されていた。【在宅看護に携わ

表1 対象者の基本属性

項目	人数	%
訪問看護の利用頻度		
1回/週	20	28.2
2回/週	22	31.0
3回/週	16	22.5
4回/週以上	12	16.9
無回答	1	1.4
主な疾患（複数回答）		
神経難病	18	
脳血管疾患	16	
がん	10	
認知症	8	
心疾患	6	
肺疾患	6	
その他	17	
年齢		
40歳未満	6	8.4
40歳代	0	0.0
50歳代	6	8.4
60歳代	13	18.3
70歳代	20	28.2
80歳代	19	26.8
90歳以上	7	9.9
要介護状態区分		
要支援1・要支援2	4	5.6
要介護1	6	8.5
要介護2	6	8.5
要介護3	7	9.9
要介護4	12	16.9
要介護5	25	35.2
介護認定は受けていない	10	14.0
無回答	1	1.4
会話の状況		
問題なし	33	46.4
会話に問題はあるが、学生との意思疎通は可能	19	26.8
学生との意思疎通は難しい	19	26.8
現在の生活状況		
一人暮らし	11	15.5
家族と同居だが、訪問看護中は家族不在が多い	14	19.7
家族と同居で、訪問看護中は家族同席が多い	46	64.8
主介護者		
なし	6	8.5
配偶者	30	42.2
子ども	21	29.6
親	6	8.5
その他	8	11.2
内訳		
配偶者と子(2)		
弟・妹(2)		
嫁(2)		
長男夫婦(1)		
ヘルパー(1)		
記載者		
本人	17	24.0
家族主介護者	47	66.2
両方	4	5.6
その他	1	1.4
無回答	2	2.8

る人材育成への貢献】は25名から25コードあり、そのうち、実習に協力することへのやりがいの質問に対して、無回答が4名、「大変感じる」、「まあまあ感じる」が17名、「あまり感じない」、「全然感じない」が4名であった。

【実習協力による精神的健康面への受益】は、「実習生が来ているときは、気持ちがあがえり、刺激されて良い」という《療養者の気分転換》、「若い学生とのふれあいが楽しみ」という《家族介護者の楽しみ》という2つのサブカテゴリで構成されていた。【実習協力による精神的健康面への受益】は6名から6コードあり、そのうち、実習に協力することへのやりがいの質問に対して、無回答が1名、「大変感じる」、「まあまあ感じる」が5名、「あまり感じない」、「全然感じない」が0名であった。

【訪問看護師からの依頼】は、実習協力を《頼まれたから》、特に《断る理由がない》という2つのサブカテゴリで構成されていた。【訪問看護師からの依頼】は14名から14コードあり、そのうち、実習に協力することへのやりがいの質問に対して、無回答が1名、「大変感じる」、「まあまあ感じる」が9名、「あまり感じない」、「全然感じない」が4名であった。

実習を受け入れて良かったことに関する自由記載は、39名（54.9%）から回答があり、質的分析の結果、34コードが得られ、【実習生の学びに貢献する喜び】【実習生の対応に対する満足感】の2つのカテゴリが抽出された（表4）。

【実習生の学びに貢献する喜び】は「勉強したことが役立ってくれば嬉しい」という《実習生の役に立てば嬉しい》の1つのサブカテゴリがあった。【実習生の学びに貢献する喜び】は5名から5コードあり、そのうち、実習に協力することへのやりがいの質問に対して、無回答が1名、「大変感じる」、「まあまあ感じる」が3名、「あまり感じない」、「全然感じない」が1名であった。

表2 実習に協力することへのやりがい

	n=58	
	人数	%
全然やりがいは感じない	4	6.9
あまりやりがいは感じない	9	15.5
まあまあやりがいを感じる	27	46.6
大変やりがいを感じる	16	27.6
その他	2	3.4

表3 実習に協力している理由

カテゴリ	サブカテゴリ	コード例
在宅看護に携わる 人材育成への貢献 (25コード)	実習生の学習のため	<ul style="list-style-type: none"> これから在宅患者が多くなりため、多様に対応してもらいたい 学生の質の向上のため 実習で今後の勉強に役立ててほしい 在宅で医療介護を受ける高齢者が増加する状況で、人材育成の一助となれば何より 経験を通して実社会に出てからの学習に役立てて欲しい 学校ではマニュアルを教えるが、看護などの医療に携わる人は患者の心身の痛みを知らないと、本当の看護とは言えないと思うから
	在宅療養者の生活を 理解してほしいため	<ul style="list-style-type: none"> 病院の医師や看護師にもっと在宅医療を理解してもらいたいの、学生が実習をすれば、看護師になった時に、少しでも理解してもらえるとと思うから 訪問看護で医療機関に行けない患者が助かっていることを知ってもらうため 療養者にとってより良い看護を受けるため、現状を良く知ってもらうため 若い人に、少しでも介護について知ってもらい、興味を持って欲しいから こんな子がいるということを知ってもらい、理解して欲しいため
	社会貢献	<ul style="list-style-type: none"> 社会還元 お役に立てればと思い 介護に携わる人に協力したいと思っている
	療養者の気分転換	<ul style="list-style-type: none"> 実習生が来ている時は、気持ちが若がえり、刺激されて良い 人が来ると元気でいられる 孫と同世代の学生が来ると、本人の気持ちが和む 療養者が楽しみにしている
実習協力による精神的 健康面への受益 (6コード)	家族介護者の楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> 若い学生とのふれあいが楽しい 人が来ると気分がいい
	頼まれたから	<ul style="list-style-type: none"> 訪問看護ステーションに協力を依頼されたから 訪問看護師に頼まれているから 看護師が連れてくるから
訪問看護師からの依頼 (14コード)	断る理由がない	<ul style="list-style-type: none"> 受け入れられない理由がない 依頼され、断る理由が無い 当たり前と思っている

表4 実習を受けて良かったこと

カテゴリ	サブカテゴリ	コード例
実習生の学びに 貢献する喜び (5コード)	実習生の役に立てば嬉しい	<ul style="list-style-type: none"> 自分のような人間を患者として知ってもらうことが良い 複数の療養者に関わって、体験を積み、多面的に考慮できる専門家に成長してほしい 勉強したことが役立ってくれば嬉しい 未来の訪問看護師になるために役立てればと思う
	実習生との関わりが刺激になる	<ul style="list-style-type: none"> 自分から会話することが少なくなってきたが、学生と楽しそうに会話している やる気のある学生は質問したり、話をしてくれるので、こちらも楽しい気分になり、元気をもらえる 若い人と会話できるので楽しい 雰囲気明るくなり、難聴や失語症だが、一生懸命話をしようとする様になった 療養者と話してくれて、刺激になる
実習生の対応に 対する満足感 (29コード)	実習生による心遣いやケアへの感謝	<ul style="list-style-type: none"> 実習生が廃液バッグ用のポシェットを手作りしてくれたため、嫌がっていた外出が楽しみになった 食事やリハビリについて調べて教えてもらい、嬉しかった 受け入れる以前よりは介護に注意するようになった 便秘がちな療養者のために水分や食品について分かりやすい資料を作ってくれた
	実習生の態度に好感	<ul style="list-style-type: none"> 訪問看護の実習も熱心でしたが、とても好感が持てた 一生懸命な学生の熱意に触れたとき、受け入れて良かったと思う

【実習生の対応に対する満足感】は、「自分から会話をすることが少なくなってきたが、学生と楽しそうに会話している」という《実習生との関わりが刺激になる》、「実習生が廃液バッグ用のポシェットを手作りしてくれたため、嫌がっていた外出が楽しみになった」という《実習生による心遣いやケアへの感謝》、「一生懸命な学生さんの熱意に触れたとき、受け入れて良かったと思う」という《実習生の態度に好感》の3つのサブカテゴリで構成されていた。【実習生の対応に対する満足感】は29名から29コードあり、そのうち、実習に協力することへのやりがいの質問に対して、無

回答が4名、「大変感じる」、「まあまあ感じる」が21名、「あまり感じない」、「全然感じない」が4名であった。

実習生に学んでほしいことに関する自由記載は、42名（59.2%）から回答があり、質的分析の結果、33コードが得られ、カテゴリは【療養者・家族の気持ちに配慮したコミュニケーション】【個別性の高いケア】【介護負担を含む在宅療養の実践】【基本的マナー】【アセスメント力】であった（表5）。

実習生に学んでほしいことは、「療養者と会話をし、療養者の考え方や気持ち、どうしているかを考えているかを引き出す様に話してほしい」という【療養者・

表5 実習生に学んでほしいこと

カテゴリ	コード例
療養者・家族の気持ちに配慮したコミュニケーション (15コード)	<ul style="list-style-type: none"> ・在宅療養者や介護者の不安を汲み取って、どんなアドバイスが有効なのかを学んでほしい ・療養者や家族の思いをくみ取り、療養者・家族の立場になってケアをできるようになって欲しい ・療養者は個々により受け取り方が違うので、その感情を察して欲しい ・療養者と会話をして、療養者の考え方や気持ち、どういことを考えているかを引き出す様に話してほしい
個性の高いケア (6コード)	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の症状に合わせた独自のケアをしていること。何事も本人の意思を尊重している ・個々の在宅療養の違いをよく学んで、後にいかしてほしい ・病院では患者だが、家に帰れば医療ケア等があっても一生活者である。療養者・家族が安心して暮らせるように手助けしてくれる訪問看護のあり方をみてほしい
介護負担を含む在宅療養の実際 (6コード)	<ul style="list-style-type: none"> ・老老介護で体力が衰え、日常生活の些細な介助が大変であることを知ってほしい ・介護は家族だけでは限界があり、誰かの力を借りないと、成り立たないということをみてほしい ・在宅介護をしている各家庭の環境や雰囲気を見てほしい
基本的マナー (5コード)	<ul style="list-style-type: none"> ・見てだけでなく、積極的に対話して欲しい ・座って話すなど看護師のふるまいをよく見て欲しい ・実践して学んで欲しい。
アセスメント力 (1コード)	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな症状の病人と接する事で、判断力を身につけて欲しい

家族の気持ちに配慮したコミュニケーション】、「本人の症状に合わせた独自のケアをしていること。何事も本人の意思を尊重している」という【個性の高いケア】、「老老介護で体力が衰え、日常生活の些細な介助が大変であることを知ってほしい」、「在宅介護をしている各家庭の環境や雰囲気をみてほしい」という【介護負担を含む在宅療養の実際】、「座って話すなど看護師のふるまいをよく見て欲しい」という【基本的マナー】、「いろいろな症状の病人と接する事で、判断力を身につけて欲しい」という【アセスメント力】の5つのカテゴリが抽出された。

IV. 考察

1. 実習生とのコミュニケーションを通して気分転換を図る療養者・家族

療養者・家族が訪問看護実習を受け入れてよかったこととして、比較的コード数の多いカテゴリは【実習生の対応に対する満足感】であり、中でもサブカテゴリ《実習生との関わりが刺激になる》のコード数が多かった。また、実習協力の理由として抽出されたカテゴリ【実習協力による精神的健康面への受益】のサブカテゴリには、「気が若がり、刺激されて良い」などの《療養者の気分転換》、「若い学生とのふれあいが楽しみ」などの《家族介護者の楽しみ》があり、実習生との関わりが良い刺激になるという内容であった。先行研究においても、療養者・家族が実習協力によって「楽しみや喜び」などの肯定的認識を得ている⁸⁾との同様の報告がある。また、高齢の在宅療養者の中に

は、「孫と同世代の学生が来てくださることで、本人の気持ちが和む」というように、社会の中の子供をみる大人としての視点⁸⁾で、実習生を捉える療養者もいたとの報告がある。病院における看護学実習でも、母性看護学実習で実習生が話し相手となりリラックスできたという報告⁵⁾や、小児看護学実習で患児の家族が実習生の存在を付き添いのパートナーと感じていたという報告⁶⁾がある。これらのことから、実習対象者である療養者・家族は実習生の存在に様々な意義を見出し、コミュニケーションを通して気分転換を図っていることが示唆された。

また、【実習生の対応に対する満足感】のサブカテゴリ《実習生との関わりが刺激になる》には、「本人が若き時代を思い出したり、やる気をおこさせる」「本人が積極的に意思疎通を図ろうとする様子が見受けられる」というコードがあり、先行研究においても「学生との関わりが気分転換となり、生活意欲の向上につながる⁹⁾」「学生の存在そのものが励みとなり、治療に前向きになった¹⁰⁾」と本調査と同様の報告がある。さらに、【実習生の対応に対する満足感】にはサブカテゴリ《実習生による心遣いやケアへの感謝》も挙げられていた。実習生が実施したケアに関する患者の肯定的認識としては、精神看護学実習において実習生が実施した生活指導に対する感謝¹⁰⁾、地域看護学実習では、対象者に合わせた支援、家族への支援、教材の提供⁸⁾に関する肯定的認識が報告されている。これは対象者と関係を構築しながら、ニーズに対応しようとする実習生の積極的な態度が、長期療養生活の中での良い刺激となり、また対象者のセルフケアの向上につながる

ことを示唆していた。したがって、訪問看護実習においても、学生が対象者のニーズに沿ったケアを計画・実施できるように看護過程の展開を丁寧に指導していくことが重要であり、ひいては療養者・家族の【実習生の対応に対する満足感】を高めることにつながると考えられた。

2. 実習協力に社会的役割を認識する療養者・家族

実習に協力することへのやりがいについては、75%の療養者・家族が「大変感じる」と「まあまあ感じる」と回答しており、多くの療養者・家族は実習協力にやりがいを感じていた。また、療養者・家族が訪問看護実習を受け入れてよかったこととして、カテゴリ《実習生の学びに貢献する喜び》があり、実習に協力している理由としても、《在宅看護に携わる人材育成への貢献》が挙げられた。病院実習における受け持ち患者の意識に関する先行研究としては、「学生の成長への期待」や「学生の学習のため」という肯定的認識が報告^{5,7)}されているが、訪問看護実習においても人材育成への貢献という意義を見出し、やりがいや喜びを感じている療養者・家族もいることが明らかとなった。一方、実習協力にやりがいを「全然感じない」と回答した4名(7%)のうち、3名は実習に協力している理由について、「看護師が連れてくるから」等の【訪問看護師からの依頼】を挙げていた。在宅看護実習では長期に渡り実習を受け入れている療養者・家族が多いことから、実習受入れ時のみならず、実習受入れを承諾した後も、定期的に療養者・家族の意向を確認する必要があると考えられた。

また、実習生に学んでほしいこととしては、【個別性の高いケア】、【アセスメント力】という在宅看護過程に関連する内容、【介護負担を含む在宅療養の実際】という在宅看護の特徴に関連する内容、【療養者・家族の気持ちに配慮したコミュニケーション】、【基本的マナー】という実習態度に関連する内容など、多種多様な内容が挙げられ、教育的視点を持つ療養者・家族がいることも明らかとなった。先行研究においても、実習生に知識の確認をさせるため、患者自ら意図的に教育的活動を行っていたという報告⁹⁾がある。これらのことから、実習協力に社会的役割を認識し、教育的視点を持つ療養者・家族に対しては、本調査で得られた実習生に学んでほしいことを中心に実習生の学びをフィードバックしていくことが、実習協力における肯定的認識を高めることにつながると考える。

3. 実習対象者の肯定的認識に着目する重要性と教育方法への示唆

実習を受け入れて良かったこととして挙げられたサブカテゴリ《実習生との関わりが刺激になる》《実習生の役に立てばうれしい》は、それぞれ実習協力の理由にあるカテゴリ【実習協力による精神的健康面への受益】【在宅看護に携わる人材育成への貢献】と類似した内容であった。これらのことから、療養者と家族の肯定的認識を高める視点に着目することは重要であり、療養者・家族のQOL向上や円滑な実習運営につながると考える。

また、先にも述べたが療養者・家族の【実習生の対応に対する満足感】を高めるための教育方法の工夫として、学生に対しては看護過程を丁寧に指導すること、実習協力に社会的役割を認識している療養者・家族に対しては、学生の学びをフィードバックすることが考えられた。対象者の実習への肯定的認識を高めることによって、学生への教育効果も高まる可能性が考えられ、実習対象者の肯定的認識を高める教育方法の更なる検討も必要であると考ええる。

V. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象は、1県内に所在する看護系大学の実習に協力している在宅療養者・家族であるため、一般化には限界がある。しかし、訪問看護実習の実習対象者に焦点をあて、さらに療養者・家族が認識する肯定的側面を明らかにした点は意義深いものと考ええる。今後は、療養者・家族の肯定的認識を高める在宅看護実習の運営方法について検討していく必要がある。

結論

75%の療養者・家族は実習への協力にやりがいを感じており、療養者・家族の肯定的認識としては【実習生の対応に対する満足感】【実習生の学びに貢献する喜び】が抽出された。療養者と家族の肯定的認識を高める視点に着目することは重要であり、療養者・家族のQOL向上や円滑な実習運営につながると考える。また、療養者・家族の肯定的認識を高める教育方法の工夫としては、学生に対する看護過程の丁寧な指導、実習協力者に対する学生の学びのフィードバックが示唆された。

謝辞

本調査にご協力くださいました療養者様、ご家族の皆様、訪問看護ステーションの皆様、A県内の大学教員の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、第33回日本看護科学学会学術集会（大阪）で発表したものである。

引用文献

- 1) 石井敦子, 土橋まどか, 岡本光代, 他. 在宅看護実習における受け持ち事例と看護技術の経験に関する実態調査. 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要. 2009;5:49-56.
- 2) 黒白恵子, 小林紀明, 堤千鶴子. 在宅看護学実習における看護技術の学習状況と課題-第二報-. 目白大学保健科学研究. 2011;4:83-89.
- 3) 小森直美, 小路ますみ, 藤岡あゆみ. 本学在宅看護実習における対象事例ならびに学生の技術体験に関する実態調査. 福岡県立大学看護学研究紀要. 2007;5(1):34-42.
- 4) 牛久保美津子, 横山詞果, 川尻洋美, 他. 群馬大学の在宅看護学実習における学生の体験内容と実習課題. 群馬保健学紀要. 2012;33:9-18.
- 5) 羽田野花美. 母性看護学実習において看護学生が受け持つことに対する妊産褥婦の意識. 愛媛県立医療技術短期大学紀要. 2001;14:9-16.
- 6) 森浩美, 小口初枝, 岡田洋子. 小児看護学実習における付き添い家族の認識-子どもが看護学生の受け持ち患者になって思ったこと-. 日本小児看護学会誌. 2012;21(3):22-28.
- 7) 片岡久美恵, 大場広美, 中川史子, 他. 臨地実習で看護学生の受け持ちになることに対する患者の意識 第2報. 第37回看護教育. 2006;431-433.
- 8) 原田静香, 荒賀直子, 山口忍, 他. 地域看護学専攻における在宅ケア実習の評価-実習対象者の調査から-. 順天堂医療短期大学紀要. 2004;15:36-44.
- 9) 小林悦子. 臨地実習を受け入れる患者の思い-実習前後の面接調査から-. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター. 看護教育研究集録. 2004;29(3):79-86.
- 10) 藤野成美. 患者が受け持ちを承諾するまでの意思決定パターンに関する研究. 日本看護研究学会雑誌. 2005. 28;5:97-103.

In-home patients' and their families' positive perceptions of home care nursing practicum

Eiko OGASAWARA

Graduate School of Health Sciences, Niigata University

Key words : home care nursing, home care nursing practicum, nursing education, in-home patient, positive perception

Abstract AIM: This study clarified the positive perceptions of in-home patients and their families who agreed to nursing student practicum. METHODS: In-home patients and their families who agreed to nursing student practicum completed a questionnaire. RESULTS: There were 71 valid responses (76%). Of those responses, 75% felt satisfied with the acceptance of nursing practicum. Reasons to accept nursing practicum were “contribution to human resources development for in-home care,” “mental health benefits from the acceptance of nursing practica,” and “relationship with the visiting nurse.” Benefits from the acceptance of nursing practicum were “satisfaction with student's attitude” and “pleasure of contributing to student learning.” In-home patients and their families expected students to learn “considerate communication toward in-home patients and their families,” “care in deference to personality,” “the state of home care,” and so on. CONCLUSION: It is important that we focus on the enhancement of positive perceptions by in-home patients and their families. It helps improve their quality of life and manage practicum smoothly.

Accepted : 2017. 1 .23